

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2021
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「ほっこり」 オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

選者コメント

1. 『天女銭湯』 ペク・ヒナ・作 長谷川義史・訳 ブロンズ新社 2016

◆女の子がお母さんに連れられて銭湯にいて、そこで、髪の毛を変な形に結ったおばあさんに会って、そのおばあさんから、水風呂遊びの極意を教わって、そのお礼にヤクルトをあげて……そのヤクルトを飲むおばあさんの顔のアップが表紙！ ファンタスティックな話なんだけど、ちっともファンタスティックな雰囲気はなく、そこには下町の情景が広がっている。そして、登場人物はすべて粘土細工というのがユニーク。韓国ならではの、ほっこり絵本。

2. 『ぜつぼうの濁点』 原田宗典・作 柚木沙耶郎・絵 教育画劇 2006

◆ ひらがなの国で、「ぜつぼう」というご主人に仕えていた「濁点」が、自分があるばかりにご主人さまは悲しい思いをなさっている、いっそ、自分はいないほうがと考えると、ご主人さまにお願いして、道に捨ててもらおう……のだが、だれも拾ってくれない！ というさびしい話なのだが、だいじょうぶ。日本ならではの、ほっこり絵本。

3. 『字が汚い！』 新保信長・著 文藝春秋 2017

◆「字が汚い！」、じつに不思議な言葉だ。「読みづらい」というのはわかる。しかし、「汚い」？ いったい、どこが、何が汚いのだ？！ そんな不思議を解明したい人のための本がこれ。習字を習うと汚くなくなるのか。殺人犯の字は汚いのか。伝説的な悪筆家、石原慎太郎の字はそれほど汚かったのか？ などなど、証拠写真とともに楽しんでください。そのうち、ほっこりしてきます。

4. 『春原さんのリコーダー』 東直子・著 ちくま文庫 2019

- ◆直子の第一歌集が文庫で登場。
- ・ 廃村を告げる活字に桃の皮ふればにじみゆくばかり 来て
 - ・ ゆうだちの生まれ損ねた空は抱くうっすらすいかの匂いのシャツを
 - ・ ライオンの塑像によりそい眠るときわたしはほんの夏草になる
 - ・ 鈴の音の激しい夜に一つずつ解かれて私はあいまいになる



選者：東雅夫氏（アンソロジスト・文芸評論家）

1. 『恐怖の愉しみ（下）』 平井呈一・編訳 創元推理文庫 1985

（『こわい話・気味のわるい話3』 平井呈一・編訳 牧神社 1974）

◆今期のお題は「ほっこり」する話（笑）。何をもって「ほっこり」と感じるかは……まあ、個人差が多いでしょうな。ふだんから一読慄然のホラーばかり読んでいる小生の「ほっこり」は、たぶん貴方が予想する「ほっこり」とは……以下略。まあいいや、とりあえず、ジェントル・ゴースト・ストーリー（優しい幽霊譚）と呼ばれる分野の名作を含む本書から。特にお勧めしたいのが、巻末におさめられたメアリ・E・ウィルキンズ・フリーマンの「南西の部屋」。作者は、米国東部のニュー・イングランドとして一生を送った女性作家。叔母さんが亡くなった部屋で頻発する怪異現象の果てに……おそろしうて、やがておかしき人の世の。メの姉ちゃんの台詞が本当に素晴らしい。あと、アーサー・キラ・クーチ「一対の手」も、ラストで滂沱の涙（＝感涙）にむせぶ一篇。

2. 『骸骨』 ジェローム・K・ジェローム・著 中野善夫・編訳 国書刊行会 2021

◆ジェローム・K・ジェロームといえば、英国ユーモア小説の名作『ボートの三人男』で知られる前世紀末の作家だが（というか、同書のみワンプック・オーサーと見なされがちだが）、このほど国書刊行会から凝った装幀で刊行された本書は、彼の多方面にわたる怪奇幻想小説を蒐めた良質の作品集。巻頭作の「食後の夜話」は、英国伝統の幽霊物語が綴れ織りとなって繰りひろげられる長めの作品で、ここには『ボートの三人男』の作者の面影が色濃い。表題作「骸骨」は、恨みをのんで死んだ男が死後、仇敵に復讐を果たす物語。短い作品だが、実話の趣がそこはかとなく漂うのが良い。やはり実話風の箇所もある「二本杉の館」には、作者のイースト・エンド体験が反映されているかのようだ。宏壮な邸宅と庭園の管理を任されている、美しいが貧しい女性。たまたま、その館に迷いこんだ主人公は、彼女に切ない恋心を抱くのだが……実在と非在のあいだに、妖しくたゆたうかのごとき陋巷の魅力的な館と女性を鮮やかに描いて、比類がない。

3. 『律子慕情』 小池真理子・著 集英社文庫 2016

◆小池真理子も、ときに救いようもない恐ろしい話を書く作家だが、本書は例外的なジェントル・ゴースト・ストーリー小説集。親しい死者と交流が可能な「律子」さん（高度経済成長期世代）の一代記に託して綴られる、作者自身の成長物語でもある。全六篇を収めるが、とりわけ巻頭の「恋慕」と巻末の「慕情」は、二篇で一対を成すかのような物語。俳優を志望していた憧れの「叔父さん」が、能登の旅宿で縊死して果てる。律子の母親に寄せる、秘めたる叔父さんの愛情。律子自身の淡い思慕の念……。世の中には、こういうゴースト・ストーリーでなければ頭わし得ない境地というものがあるのだと、教えてくれた忘れがたい作品である。特に思春期の皆さんに、一読をお勧めしたい（私が編んだ最新の小池真理子アンソロジー『ふしぎな話』角川ホラー文庫にも採録しました！）。

